

# 国会会議録検索システムにみる言語の平準化

Language levelling in the minutes of the National Diet of Japan:  
Research based on a database system

田邊 和子・小池 恵子・芹澤 瑞帆

Kazuko TANABE・Keiko KOIKE・Mizuho SERIZAWA

## 1. はじめに

本研究は、「国会会議録検索システム」を利用し、国会会議録をコーパスとし、日本語の言語使用の変化を考察することを目的としている。国会会議録（以後「会議録」）は、第1回国会からの衆・参両院の本会議、委員会等の会議録について収録している。

日本は、1890年の国会開設以来、この記録が断続することなく連綿と続けられているという世界的にも希有な記録を持つ国の一つである（松田、2004:55）。1999年より一部運用開始、2001年よりインターネット上での公開が本格的に開始された（鈴木、1994:77）。これにより、1947年第1回国会開催より2024年までの77年間の国会のほぼすべての会議録が、国会会議録検索システム（<http://kokkai.ndl.go.jp/>）においてオンライン検索できるようになった。

本論文執筆のきっかけは、2020年5月に *Language Sciences* (vol.79) において、「言語の民主化 (Democratization)」の特集が組まれ、その中の論文 ‘Investigating colloquialization in the British parliamentary record in the late 19th and early 20th century’ (19及び20世紀の英国議会録を対象とした口語化の調査) by Hiltunen et al’ を読んだことに因る。Hiltunen らは、英国議会議事録コーパス *the Hansard Corpus* (Alexander and Davies, 2015) を利用して1870~1930年の60年間の総数4千万語規模のコーパスを対象に、通時的な考察を行った。対象として、主に、‘is going to’ ‘I will not’ ‘we have to’ などの100以上の句表現を取り上げて、n-gram による頻度を抽出し比較をして、ことばの民主化と口語化の関係を捉えようとしたのである。本論文は、Hiltunen らの研究と比較したら、規模ははるかに小さいが、日本語におけることばの民主化を考える際に、参考になる手法であると思い、「国会会議録」に応用してみることにした。

## 2. 「平準化」という概念

前項で紹介した Hiltunen らの研究は、口語化 (colloquialization) という視点で議会での言語使用の変化を分析しようとした。この口語化は、より親しみやすい言葉遣い、現実社会をより直接的に反映した形ということであろう。しかし、たとえ、やや古めかしい言葉遣いであっても、元々議会審議は口頭で行われてきたのだから、その変化を「口語化」というの

は適切ではないのではないかという疑問が著者間で話し合われた。Hiltunen らは、論文の中の「口語化」というのは、現代語化ともいうべき「砕けた言い方」化という意味で使ったのだと思うが、言語現象を表面的に捉えている描写である。あくまで「書き言葉」に対して「話し言葉」があるので、このような口語体の内部での通時的变化を「口語化」と示すのは、適切ではないと考えた。そこで、ことばの民主化に伴う言語変化を起こす根源的な要因を示した新たな概念が必要ではないかという課題が浮かび上がった。

以上のような状況の中で参考にしたのが、同じ *Language sciences* (2020) の特集の中の別の論文、'Frequency changes and stylistic levelling of *though* in diachronic and synchronic varieties of English -linguistic democratization? (通時的・共時的 'though' の考察に見る頻度の変化と文体における平準化—英語の言語的民主化?)' (Schützler, 2020) の 'stylistic levelling' という用語である。この 'levelling' は、辞書的意味としては、差や違いをなくす、例えば、「でこぼこの道路を均す・平坦にする」というような意味である。

論文では、元は、譲歩の意味をもつ接続助詞 'though' (～にもかかわらず) が、1860年代では、フィクションのジャンルで多く使われていた傾向があったが、1980年代には、新聞・雑誌・ノンフィクションのジャンルまで使われるようになり、特に多く使用されるジャンル間の境がほぼ消滅したことを検証している。このような使用分野・頻度の変化には、'though' の談話上の使用規制にも変化があり、譲歩節の最初に位置付けられていた 'though' が、発話の最後に「～だけどね」と終助詞のような意味で使われるようになったことも示している。日本語では、「～というか」がこの例に非常に似ている変化をしている。「～というか」の場合は、発話の最初に使用され、まるで問投詞のように「ていうか」「てか」「つか」など様々な変異体が生まれ、他者からの発話を受けて情報の修正・追加機能を伴う談話標識 (discourse marker) に変化している。このような一連の言語変化を促すものとして、言語の平等化としての levelling (平準化) をここに提案したい。Schützler は、その変化を 'softening' と描写している。

日本語にとって、前述の英語の 'though' に類似した変化を遂げたのが、「というか」ではないだろうか。文中では、複合詞として、譲歩の意味で使われていたが (1-a)、この30年ぐらいのうちに、「てか」「つか」等の fillar (やや、逆説的な意味を持つ「いいさし」としての例が、拡大されてきた (2-a,b)。

例：

1-a 赤というか紅色といったほうがいだろう。

2-a 「みんな来てないね、まだ。」

2-b 「てか、暑くない? この部屋。」

Schützler のモデル (図1) によると、文体的平準化というのは、口語化と非公式化 (informalization) が混合したものということになる。本論文も、これを参考にして、言語の民主化を突き動かしている原動力というのは、口語化や非公式化であり、これが平準化をも

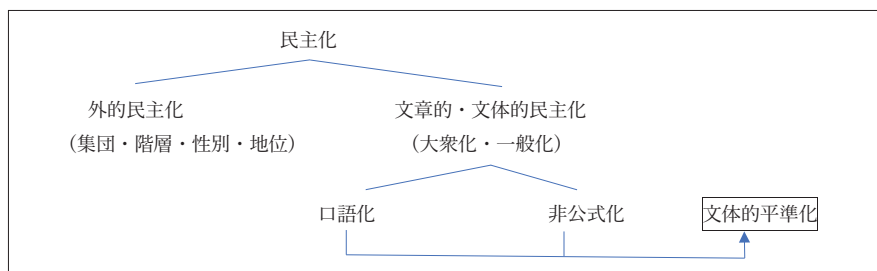


図1 Schützlerの民主化形成のモデル (田邊訳)

たらしめているのではないかという仮説に基づいて具体的に調査をすることにする。

### 3. 分析

#### 3.1 分析対象の決定

分析の対象とする項目として、①文法 ②語彙 について調査することとした。

##### ① 文法

- 『近代書き言葉はこうしてできた』(田中, 2013) では「であります」「でございます」「です」の変化が書き言葉の例として紹介されていたが、この3例は、話し言葉としても使用の変化が認められるので取り上げることにした。
- 日本語教育教材『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』(p.5) に掲載されている<話し言葉の表現>の例として挙げられているものを参考とした。  
そこには、接続詞、接続助詞、動詞・形容詞のテ形、縮約形(じゃ・ちゃ・ちゃった)、副詞が挙げられている。
- 終助詞「ね」「よ」「よね」の使用を対象に、話し言葉の変化をとりあげることにした。

##### ② 語彙

カタカナ語の使用の変化を調査対象とした。カタカナ語は、日本語で表せない概念・事象・事物が外から入ってきたときに使用される<sup>(1)</sup>。従来使用されていた日本語に代わり個々のカタカナ語「～ハラスメント」「アイデンティティー」「ジェンダー」が、どのように日本語の中に定着して使用され、一般化されていくのか。このことが平準化として捉えることができるのではないかと考え調査対象とした。

#### 3.2 分析方法

分析の手順としては、対象となる言葉を打ち込み、コーパス内にあらかじめ設けられている検索操作表示システムを利用した。

図2～図4は、データ収集の最初の年1947年から10年ごとに期間を設定し、対象語個々の採用数を調べて、対象語総数に対する割合を算出した。

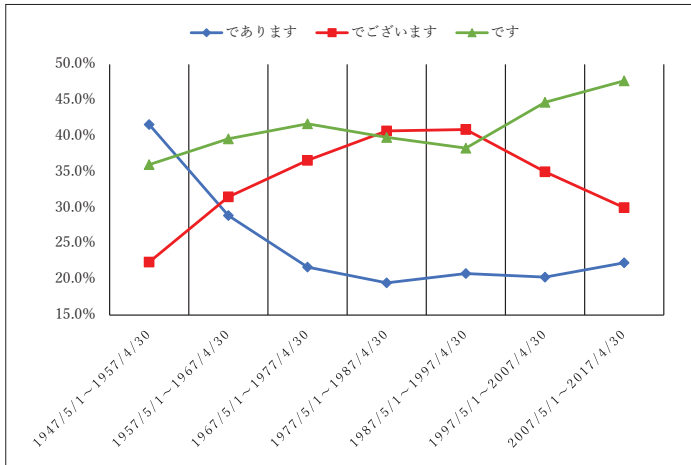


図2 「であります」「でございます」「です」の推移①

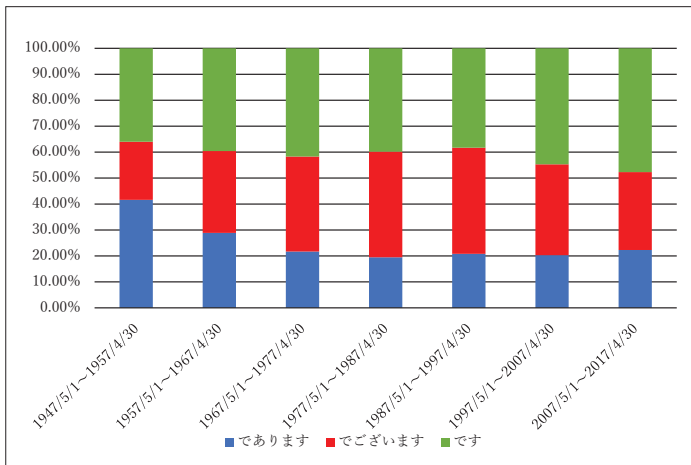


図3 「であります」「でございます」「です」の推移②

国会会議録検索システムの中には、検索期間を1年・3年・5年・10年以内という選択肢が用意されており、それぞれの項目をクリックするとその期間の採用数が表示されるという機能がある。図5～図8においては、このシステムを利用した。ただし、20年以上遡る選択肢が用意されていなかったため、「20年以内」以前は、該当する期間の年数を打ち込み、採用件数を導き出した。こうして、それぞれの検索語の、期間ごと（1年以内・3年以内・5年以内・10年以内・20年以内、図6～8は30年以内、40年以内まで）の該当件数を調べ、そ

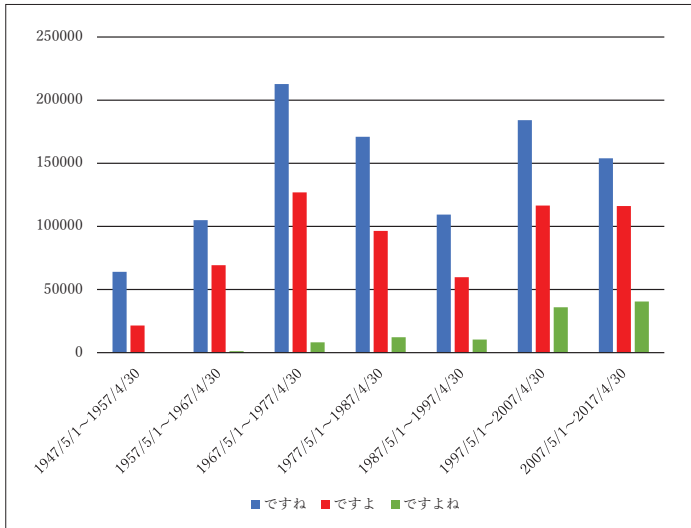


図4 「です」 + 「ね、よ、よね」の推移

それぞれの時期の年間平均件数を割り出した。その数字が、20年以内の年間平均から1年以内の件数の方がだんだん大きくなっていけば、使用頻度が高まっているとし、逆に、最近になればなるほど平均件数が少なくなれば、使用頻度が低くなっていると判断した。

### 3.3 分析

#### 3.3.1 「であります」「でございます」「です」の推移

図2・3は「であります」「でございます」「です」の採用件数を期間ごとに調べ、この三つの表現全体におけるそれぞれの占める割合を示したグラフである。

それぞれの使用率の変化をこの70年でみると「であります」がほぼ40%から20%へと減っているのが第一の特徴である。「です」は、約35%から45%へと増加している。「でございます」は、1987年～1997年の10年では、40%を超える勢いであったが、その後、割合が低くなり、2000年に入り、ほぼ30%に落ち着いていることは、日本語の簡素化の経過を示す指標と考えられる。これらのことから、「でございます」は、「であります」の衰退の受け皿と一時期になったが、その後、簡素化が進み、「です」に10%ほど使用率が移行したと解釈できる。

#### 3.3.2 「です」 + 「ね、よ、よね」の推移

図4は終助詞使用の変化をまとめたグラフである。「ね」と「よ」の単独使用が1967年まで大勢を占めていたが、1967年を契機に「よ+ね」の二重終助詞使用が増えていく傾向が窺える。

この理由については、本論では「情報の縄張り理論」を参考にすると次のように分析できる。川岸（2020）は、「～よ」は、話し手によって自らの情報として発信される情報（帰属）を、聞き手が自らには帰属しない情報（不帰属）として受信すると、話し手が判断する場合に用いられる。また、「～ね」は、話し手の情報を話し手と同様に既知の情報として有している聞き手に向けて確認している。」と述べている。

この二つの終助詞が連結した「～よね」は、単に「～よ」と「～ね」の組み合わせと考えると矛盾するので、新たな機能を生み出していると考えの方が妥当だろう。

例：

- a. 「聡子は、来るよ」
- b. 「聡子は、来るね」
- c. 「聡子は、来るよね」

a・b・cの違いは、聞き手と話し手の情報の所有の仕方によるものである。

a. 「来るよ」は、話し手の持っていた情報を、今ここで、聞き手に明らかにする状況で、b. 「来るね」は、話し手も聞き手もあらかじめ共有していた情報の確認である。c. 「来るよね」は、文尾に置かれている b. 「ね」の確認機能が強いと思われるが、では、直前の「よ」が入ることによってどのような効果があるか考えなければならない。

「～ね」だけであると、話し手と聞き手の立場の区別を明確にして、「私、確認する人」「あなた、答える人」という状況になるが、これに対して「～よね」は、話し手もその確認作業に加わる協働作業の様相を醸し出す。「情報の縄張り理論」では、情報の内容とその所有という観点からの分析であったが、「～よね」に関しては、語用論的に話し手と聞き手の相互関係という観点からの分析が必要なのではないかと考える。伊豆原（2003, p.7）は、「～よね」が「よ」や「ね」と大きく異なるところは、話し手の認識が聞き手の認識でもあるか（なりうるか）を確認するために用いる点、つまり話し手の認識を聞き手の認識にするのに聞き手の介在を必要とするところにあると思われる。」と述べている。発話者としての立場に聞き手をも引きずり込む効果を狙っているという解釈は、適切であろう。

では、なぜ、近年この「～よね」という二重終助詞用法が増えてきているのだろうか。日本語のコミュニケーションにおいて、話し手だけで結論を断定してしまうことを避ける傾向にあるためではないだろうか。話し手と聞き手の間で、会話の内容を共有したり、同意を求めたりする効果を期待するものである。話し手と聞き手の明らかな区別を避けようとする目的、つまり、話し手と聞き手の役割の平準化の一つとして捉えることができる。

### 3.3.3 縮約形の拡大

「であります」「でございます」の簡素化が進み「です」の使用率が増加していることから、その他の縮約形の拡大についても調査の幅を広げた。

今回調査したのは、「ですから」（「でありますから」「でございますから」の縮約形）、「じゃない」（「ではない」の縮約形）、「だから」（「ですから」の縮約形）、「ちゃった」（「てしまっ

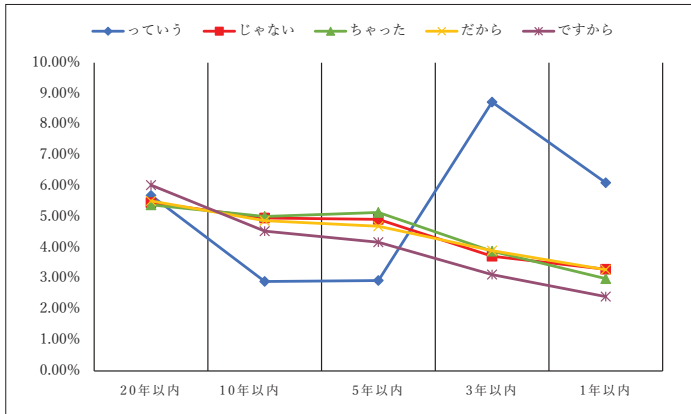


図5 縮約形の拡大

た」の縮約形)、「っていう」(「という」の縮約形)の五つである。

図5によると「っていう」を除いた他の4つの縮約形の拡大スピードのグラフは、比較的類似した傾向を示していると解釈できる。「じゃない」「ちゃった」「だから」「ですから」は、過去5年から減少の一途をたどっている。現在は、増加率はピークを越え、この4つの表現については安定している状況と解釈できる。

「っていう」は、増加率の非常に大きなピークが3年以内に見られる。ただ1年以内の増加率は減少しており、こちらも今後安定していくであろうことが推測できる。

「じゃない」「ちゃった」「だから」「ですから」の縮約形の拡大による日本語変化の平準化は、20年前に定着し、すでに使用が一般化していると解釈できる。

#### 4. カタカナ語の平準化

あらゆるところでカタカナ語を目にしたり、耳にしたりする機会が増えている。国立国語研究所では、「公共性の高い場で使われている分かりにくい「外来語」について「「外来語」言い換え提案」ということを行っている。また、文化庁でも「カタカナ語の認知率・理解率・使用率【使用率順】」というものを発表している。このような調査が行われたのは、聞き手がどこまで理解できているのかは不明であるにもかかわらず、カタカナ語を頻繁に使用するようになってきているからといえよう。カタカナ語の使用頻度の増加は、外国語への憧れ、高尚に聞こえる、初めて聞く言葉で注目を集める、日本語への置き換えが難しいなど、様々な原因が考えられる。

本論文では、メディアやSNSでも取り上げられ、時代を反映する代表的な3語「～ハラスメント」「アイデンティティ」「ジェンダー」について調査した。以下の検索用例は、それぞれの検索結果の一番古いものと、新しいものを挙げる。

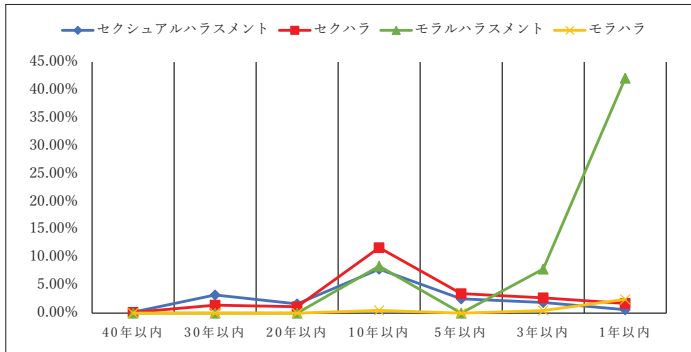


図6 「～ハラスメント」の使用増加率

#### 4.1 「ハラスメント」

今では耳慣れた言葉になっている「～ハラスメント」というカタカナ語の使用について検索した。

図6では「セクシュアルハラスメント」が40年前くらいに見られはじめ、30年前に少し増えるが、10年くらい前には、増えつつも縮約形の「セクハラ」の方が、増加率が高いことが分かる。また、同じ時期に「モラルハラスメント」の使用も増加している。この時期は「パワーハラスメント」など「～ハラスメント」というカタカナ語のバリエーションがどんどん増加していった時期とも捉えられる。1年以内では「モラルハラスメント」の増加率が40%以上と急上昇している。「セクハラ」と違い、縮約形の「モラハラ」が伸び悩んでいるのは、国会という場では「モラ」が「モラル」であると分かりにくいためであろうか。そして、「～ハラ」のバリエーションがあまりにも増えすぎたことも考えられる。

- ① 例えば最近セクシュアルハラスメントなんというって、何がハラスメントかといったら、女性がハラスメントと感じたことがハラスメントだ、…（1971年11月17日 江田五月）
- ② 例えば、先ほど申し上げた教員の性暴力防止法における指針ですとか、あるいは厚生労働省のセクシュアルハラスメント等の指針ですとか、他分野でも様々な指針がございます。（2024年6月18日 藤原朋子）

#### 4.2 「アイデンティティー」

「アイデンティティー」の意味について、デジタル大辞泉によると「自己が環境や時間の変化にかかわらず、連続する同一のものであること。主体性。自己同一性」としている<sup>2)</sup>。

しかし、国立国語研究所「「外来語」言い換え提案」では、「自分が帰属する社会などを意識している場合は、「帰属意識」ということができる。」とも記載がある。



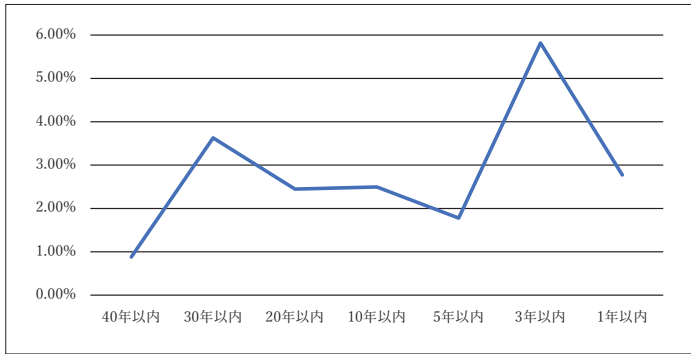


図7 「アイデンティティー」の使用増加率

また「アイデンティティー・クライシス」というカタカナ語によって「自己喪失。若者に多くみられる自己同一性の喪失。」(デジタル大辞泉)というように、「アイデンティティー」をさらに細かく分ける言葉も出てきている。

図7から明らかなように、30年前に使用が増加するが、その後少し減少し、3年以内くらいにさらなる増加を見せている。

- ① 併し少くともその取調の対象になつておる人物の氏名や住所だとか、職業、要するにこの取調の対象になつておる人のアイデンティティー、そういうものに関してここで漏らされるわけに行かないか。(1952年12月11日 杉原荒太)
- ② 要望書では、アイデンティティーの喪失、あるいは、不都合や不利益が女性に偏っているという女性の人権の問題とともに…(2024年6月19日 田村智子)

#### 4.3 「ジェンダー」

1979年に国連総会で採択され、1981年に発効された「女性差別撤廃条約」は、男女の完全な平等の達成に貢献することを目的とし、日本は1985年にこの条約を締結した。また、「男女共同参画社会基本法」は、男女共同参画社会の形成を目的とした法律で1999年に制定された。このようなことから、「ジェンダー」の語は、図8からも見て取れるように30年前くらいに使用増加率が上がったと考えられる。また、2019年に日本の「ジェンダー・ギャップ指数」が153か国中121位と過去最低を記録し、G7の中では最下位であった。そのことが3年前くらいに大きな増加を見せた原因と考えられる。

- ① クリントンもジェンダー、女性と地方、それから少数民族というこの三つを旗印にしている大統領でありますけれども、…(1993年4月12日 羽仁五郎)
- ② 次に、ジェンダー平等に関して伺います。先般、我が国のジェンダーギャップ指数

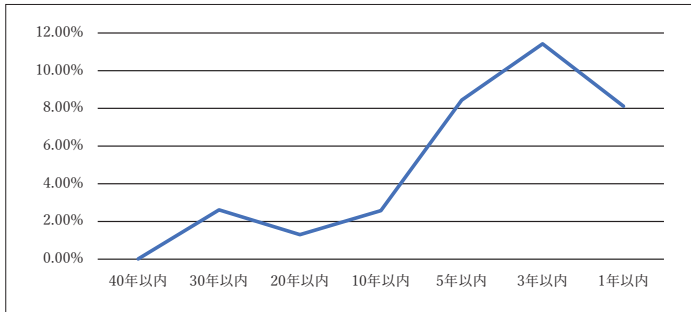


図8 「ジェンダー」の使用増加率

が世界で百十八位と公表されました。(2024年6月21日 三上えり)

#### 4.4 カタカナ語の平準化の流れ

今回の国会会議録検索システムを使った調査でもわかるように、カタカナ語は社会で起きたことや、時代背景に大きく影響を受けて使用されるようになっている。最近では新型コロナウイルス感染症が2019年に確認されてから、人々の暮らしが大幅に変化した。このことにより、カタカナ語も使用される頻度が上がったり、新しいカタカナ語が出来たりと様々な形で常に変化がみられた。この時期に、カタカナ語が増加したことは多くの人が感じたであろう。世界的に起きたことだけに、世界共通で通じる言葉（カタカナ語）を使用したことが一因と思われる。「パンデミック」「ステイホーム」「ロックダウン」などである。一般の人になじみがなく、分かりにくいカタカナ語をマスコミやSNSや出版物などが使いはじめる。そして、毎日のように聞いたり読んだりするようになると、当たり前のように使われるようになる。

このように、カタカナ語の使用頻度が増加し、人々に受け入れられ、さらに短縮形や派生語、造語が使用されるようになる。理解の共有により、語が一般化されていくということが、カタカナ語の平準化と考えることができよう。

#### 5. まとめ

本論文では、前半は主に日本語の表現形式として、文末表現の簡素化、文体「です」＋終助詞の終助詞使用の変化、縮約形の使用率の変化、後半は、カタカナ語の採用率の変化に焦点を当て、国会会議で使用されてきた口語形の変化を平準化という観点から考察した。これにより約80年間の話し言葉の変化の一側面が明らかになった。今回、使用したコーパス「国会会議録検索システム」は「国会会議での話し言葉」を扱い、国会という特定の場所で、使用された年月、使用者も明記されている。日常的な言語使用のデータとしては適切かという課題はあるが、その信頼度は高く、日本語の平準化の様相の考察としては、小規模ながら一

つのモデルを提示できたと思う。

## 注

- (1) 「カタカナ語」と「外来語」はデジタル大辞泉によると、カタカナ語を「片仮名で表記される語。主に外来語を指すが、和製英語についてもいう。」、外来語を「他の言語から借用し、自国語と同様に使用するようになった語。借用語。…」としている。本研究では、カタカナ表記しているもの、和製英語（本稿では取り上げない）について扱うため、「カタカナ語」を使用することとする。表記については「デジタル大辞泉」によった。
- (2) デジタル大辞泉（小学館）

## 参考文献

- 相澤正夫「『『外来語』言い換え提案』とは何であったか」（『外来語研究の新展開』、2012.10）
- Biber『コーパス言語学』（南雲堂、1998）
- 伊豆原英子「終助詞『よ』『よね』『ね』再考」（『愛知学院大学教養部紀要』第51巻第2号、2003.12）
- 川岸克己「終助詞における情報帰属の構造と動的機能」（『安田女子大学大学院紀要』25号、2020.3）
- 近藤明日子『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』（勉誠出版、2021）
- 松田謙次郎「言語資料としての国会会議録検索システム」（『Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin』巻7、2004.3）
- 松本功『国会会議録を使った日本語研究』（ひつじ書房、2008）
- 松本功『コーパスによる日本語史研究 近代編』（ひつじ書房、2021）
- 二通信子、佐藤不二子『新訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』（スリーエーネットワーク、2020）
- 鈴木悌夫「国会会議録作成の実務と課題」（『議会政治研究』30、1994.6）
- 高野繁男『日本語になった西洋語—急増するカタカナ語—』（大空社、2011）
- 田中牧郎『近代書き言葉はこうしてできた』（岩波書店、2013）
- デジタル大辞泉（小学館）

## 使用システム

国会会議録検索システム（<http://kokkai.ndl.go.jp/>）